倫風宏話

実践を支える信頼と協調と笑顔

上廣榮治

先日、しばらくぶりで古くからの友人に会って話をしていると、とても声に張りがあることに気づきました。そのことを指摘すると、年末に「第九」を歌うため、十年以上も休んでいた合唱を、また始めたからだろうということでした。

かつて年末の風物詩といえば、大掃除と紅白歌合戦でしたが、いつの頃からか、それに「第九」も加わったようです。「第九」はベートーベン最後の交響曲として知られますが、日本では戦前から「歓喜の歌」の名前で親しまれてきた名曲です。

友人によると、暮れにこの作品が演奏されるようになったのは、戦後まだ間もない頃だったそうです。当時はオーケストラの人たちもずいぶん貧しく、暮れの「第九」は正月の〝餅代〟を稼ぐための演奏会でもあったようです。とくに「第九」を選んだのはコーラスも参加できるから。つまり、出演者が多ければ多いほど、家族や友人知人が聴きにくることになり、切符がたくさんさばけるからでした。しかも合唱団は、学生や勤め人などアマチュアで構成されていましたから、費用をかけずにすみました。

結果は大成功。「歓喜の歌」がもつ明るいイメージとメロディは、戦後の貧しさから抜け出して新しく出発しようとする日本人の心をとらえたのでした。以来「第九」は年末の恒例行事となったのです。

この音楽好きの友人が合唱団に入ったのは三十数年前のことでした。忙しい仕事の気分転換と健康を考えてのことだったといいます。たしかに誰にでも、ただ聴くだけで元気になれる歌や曲があります。それを聴くと、嫌なことも忘れて楽しい気分になり、ときには励まされたりもします。友人によると、気分だけでなく、体調までがよくなるのだそうです。発声をよくするためには、姿勢が正しくなければなりません。背筋を伸ばすことで腰痛が消え、おなかから大きな声を出すことで運動やストレス解消にもなるせいか、練習日には快食、快眠になるというのです。

効用はそれだけではありません。コーラスの目的は皆が一緒に楽しく歌を歌うことですから、そこに笑顔はつきものです。笑顔は人の心に余裕と自信を生み、歌声に優しさや柔らかさをもたらして、皆を上機嫌にしてくれます。それは笑顔がもっている魔法の力といっていいかもしれません。

笑顔とともに、コーラスになくてはならないのが信頼と協調です。一人ひとりが自分の役割を果たし、それぞれのパートを尊重し合って、初めて素晴らしいハーモニー（調和）が生まれるからです。そして、それこそが大勢で歌う合唱の力なのでしょう。

それは私たちの実践でも同じです。私たちの会場に欠かせないものもまた、仲間の信頼と協調と笑顔であり、利他と愛和の心です。とりわけ倫理を伝え広めるためには、それらは不可欠の要素です。

合唱団といえば、イギリスのギャレス・マローンさんをご存じでしょうか。合唱団の組織者であり、指揮者であり、すぐれた音楽コーディネーターでもあります。

ギャレスさんは、ふだん歌とは無縁のコミュニティーや学校、職場などで、有志を募って素晴らしい合唱団に育てあげていきます。その過程を追ったドキュメンタリー番組が、ＮＨＫのＥテレや「ＢＳ世界のドキュメンタリー」で放送されましたので、ご覧になった方も多いのではないかと思います。

Ｅテレで放映された「地球ドラマチック　町中みんなで合唱団！」では、イギリスのサウスオキシーという小さな町に、八か月かけて、彼がコミュニティー合唱団を創っていく姿を追っていました。

この町に合唱団を創ることになったきっかけは、一人の牧師からギャレスさんに送られた手紙でした。サウスオキシーは第二次世界大戦のとき、ロンドン大空襲で焼け出された人たちのための住宅団地として造成された町でしたが、周囲の町からは差別的な扱いを受け、人々は自分の町に誇りを持てないでいました。そんな事情からか、町には目立った文化活動もなく、歌さえ歌う場がない状態でした。手紙は、そんな町に合唱団を創ってほしいというものでした。

ギャレスさんは、まさにそんな町にこそ合唱団を創りたいと思っていました。なぜなら、「いまのイギリスでは、歌は特別な人たちが歌うものだと多くの人たちは思い込んでいて、自らが歌おうという思いを失っている。しかし、歌は誰でもどこでも歌いたいときに歌っていいものだ。とくに皆が参加して歌う合唱は、人々のつながりを深める地域活動としても最適だ」と考えていたからでした。

ギャレスさんはまず、町のいたるところに合唱団の団員募集のポスターを貼り、チラシを配って、練習初日を迎えます。当日、練習場の小学校の教室で待っていると、老若男女、世代を超えた人たちが次々とやって来ました。その数なんと約二〇〇人。ギャレスさんは、「サウスオキシー・コミュニティー合唱団へようこそ！　みなさんが合唱を心から愛し、メンバーであることに誇りを持てるように、がんばりまし

よう！」と挨拶し、さっそく練習に入りました。ほとんどのメンバーが歌とは縁のない生活を送ってきたにもかかわらず、すぐに歌うことを楽しみ、練習が進むにつれて驚くほどのまとまりを見せ始めたのです。

その後、ギャレスさんは合唱団の成果を披露するための公演を行うことを決めますが、町には合唱団と大勢の観客を収容する施設がなく、やむなく商店街に会場を設けます。商店街での公演は音響的には多くの問題がありましたが、ギャレスさんは、「ぼくが微笑んだら、微笑み返してください。それが皆さんの歌声をより美しいものにします。お客さんたちに、我々は合唱が好きなんだ、というところを見せつけるのです」と励ますのでした。

結局、商店街の即席会場は五〇〇人を超す観客でいっぱいになり、微笑みが歌声をより感動的なものにして、聴く人の心に深く伝わっていきました。公演は大成功でした。

合唱団の種をまき、育てる手助けをするギャレスさんの手法は、ひたすら「褒(ほ)める」ことです。褒めることで、「とても歌う自信がない」と尻込みしていた人も歌えるようになっていきます。そうなると、今度は随所でユーモアを交えつつ団員のチャレンジ精神を刺激して、彼らの積極性を引き出しながら、一つの合唱団にまとめ上げていくのです。

初めは「とても歌えない」と思い込んでいた歌を「自分は歌えるんだ」と思えるようになる。一緒に歌うことで、皆が一つの目的に向かっている喜びに満たされる。ギャレスさんの揺るぎない指導のもとで開花した人々の心は、日々の暮らしも変えていったに違いありません。

私たちの実践を合唱にたとえれば、一人ひとりが仲間に和して、自分のパート（役割）を精一杯に歌い上げる。皆の歌声（実践）が愛和したとき、より元気で楽しい会場になるはずです。